

世紀転換期におけるアメリカ労働者階級の独身女性の余暇の考察

—Kathy Peiss, *Cheap Amusements: Working Women and Leisure in Turn-of-the Century New York* を読む—

川崎 恵子

目次

はじめに

1. 余暇と労働についての先行研究
2. 労働者階級の独身女性の余暇の考察—本書の要約
 - 2-1. 既婚男女と独身女性の余暇
 - 2-2. スタイルは自己表現
 - 2-3. 商業化による余暇の発展
3. 本書の意義と問題点
 - 3-1. 若い独身女性の余暇の意義
 - 3-2. 仕事より結婚を選択した理由
 - 3-3. 若い独身女性のセクシュアリティの問題
 - 3-4. 本書の問題点

はじめに

19 世紀から 20 世紀の世紀転換期、アメリカは変化の時代を迎えていた。工業化の急速な発展、消費社会の出現、移民の流入、都市化の進展により社会が急激に変化し、従来の社会秩序が危機に瀕している意識が高まり、社会や政治の改革が叫ばれた。中産階級以上の女性は貧困者や移民の救済、食品の安全、児童労働などに関する社会改革運動に参加していた¹。そして労働者階級の若い女性は働きながら確実に変化を遂げていたのである。この変化を明らかにしたのが、1986 年、キャシー・ペイス（Kathy Peiss）の『手軽な娯楽—ニューヨークの世紀転換期における働く女性の余暇について』（*Cheap Amusements: Working Women and Leisure in Turn-of-the Century New York*）である。

本書は 1880 年から 1920 年の世紀転換期のニューヨークにおける、労働者階級の若い独身女性の余暇に見られる慣習、価値観、スタイル、男女間の交流を数多くの史料をもとに考察したユニークな作品である。労働者階級の若い独身女性の余暇

を考察することで、19 世紀から 20 世紀の世紀転換期におけるアメリカ文化の変化の過程を描きだすことを目的とする。それは同性間の文化から異性間の文化へと変化するなかでのジェンダーの再定義を含んでいる。つまり労働者階級の若い独身女性が稼いだお金と自由な時間を何に費やしたか、そして社会はどのように変化し、ジェンダーの定義はどのように変化したかについての研究である。

著者は世紀転換期に着目した理由を、この時期、資本主義の発達により労働と生活時間の構造が変化し、余暇が商業化されることで労働者階級のジェンダーが影響を受けたからだと述べる。また、対象である労働者階級²の独身女性については、マルクス主義の定義である生産手段を持つという視点だけではなく、生活環境の特徴についても説明している。それによると、労働者階級の女性は移民と移民の娘が多く、安いアパート地区に暮らし、独身の間は工場、家事サービス、販売の仕事をしている。1900 年の女性賃金労働者の 5 分の 4 は独身で、およそ 3 分の 1 は 16～20 歳である。研究対象の場をニューヨーク・マンハッタンとした理由については、国際的な街であり、幅広い余暇活動と娯楽産業があり新しい文化が生まれやすいこと、そして史料が豊富にあることだと述べている。

著者はペンシルバニア大学で現代アメリカ文化史、特にジェンダー、セクシュアリティ、女性史について教鞭をとっている。専門は大衆文化であり、人々の交流や文化が日々の暮らしやアメリカ人の通念をつくりあげる方法に研究の焦点を置く³。

² 本書、12 頁。1903～1909 年の家計研究では労働者階級の家族は平均 4～6 人で構成され、年間平均 800 ドルの収入。

³ Penn Department of History
<http://www.history.upenn.edu/faculty/peiss.shtml> 2013 年 8 月 30 日アクセス。

¹ 有賀夏紀、小檜山ルイ編『アメリカ・ジェンダー史研究入門』（青木書店、2010 年）、119 頁。

本書は著者の最初の出版本であり、大衆の声や記録から現実を見つめるという著者の研究の独自性が色濃く出ている。アメリカの女性史に新しい見方を提示する貴重な学術書であり、一般書としても楽しめる娯楽性の高い一冊である。

1. 余暇と労働についての先行研究

余暇とは何であろうか。*Cheap Amusements* が出版された 20 世紀後半の余暇の定義をみてみよう。1960 年、余暇研究の第一人者であるマックス・カプランは、余暇を仕事から自立したものととらえ、人生の目的であり、自由意思で行われると定義している⁴。また、アメリカの余暇研究がテレビ、映画、読書など各論に傾倒していると批判したのが、フランスのジョフレ・デュマズディエである。余暇を単なるレジャーまたは仕事との対比ではなく、あるゆるものと関連してとらえるべきだと述べた。そして余暇を職場や家庭での義務から解放された時に、休息、気晴らし、知識や能力の養成、社会参加、創造力の発揮のために行う活動と定義づけている⁵。21 世紀に入ると、2002 年にアラン・コルバンは余暇を自由時間とし、レジャーを楽しむ時間として定義した⁶。2004 年には、杉座が余暇とはすべての時間から睡眠、仕事、家事など生活に必要な時間を差し引いた時間と定義し、遊びを通して生き方を変える価値ある時間だと述べている⁷。このように、余暇は 20 世紀には自由意思に基づく社会活動であったが、21 世紀にはレジャー、価値ある時間と定義され、より娯楽やレクリエーションの概念を高めていった。

次に労働者の余暇の先行研究を概観する。ロイ・ローゼンツワイクは、男性の余暇は階級の団結を促し、民族や宗教とも深く関わっていることを明らかにした⁸。レスリー・ウッドコック・テ

ントラーは 20 世紀初期、働く夫は毎日 2～3 時間リラックスできるが、妻は余暇を楽しむ時間はなかったと、既婚男女の余暇の違いを指摘している⁹。コルバンも同様に、世紀転換期の働く主婦は育児と家事の他に救いはなく気晴らしは認められず、主婦の余暇は怠慢や悪徳とされていたと述べている¹⁰。サラ・アイゼンステインは、労働者階級の若い女性の余暇は、ダンスホールやクラブで下品な男女と出会うものだと批判されていたと述べる¹¹。

さらに余暇を社会活動として考察するために、女性の賃金労働に関する先行研究を概観する。エリス・J・ロテッラは、1870 年の国勢調査から女性賃金労働者は貧しい移民が多く、家計のために働き、労働は性別分化されていたと示している¹²。テントラーも同様に、労働者階級の独身女性が家計のために働き、家計に貢献することで両親からの自由を得たと指摘している。しかし、最終的には労働から逃れるために結婚を望み、賃金労働が女性の人生の選択を変えることはなかったと結論づけている¹³。アイゼンステインは、ビクトリア時代の女らしさの概念とは、第一に家族としての役割と義務、第二に礼儀正しさ (propriety)、尊敬されること (respectability)、女らしさ (womanhood) であったと指摘している。この女らしさの概念から外れるために、労働者階級の女性の賃金労働は非難された。しかし現実には家計のために働き家族の役割を全うしていたのである¹⁴。また富裕階級からは、労働者階級の女性はセクシュアリティを誇示し、売春や病気をまきちらすと嫌悪されていた¹⁵。以上の先行研究は、労働者階級の既婚女性は余暇をほとんど持てなかったこと、独身女性は家計を助け、両親から自由になるために賃金労働

University Press, 1983), 127-162, 228.

⁹ Leslie Woodcock Tentler, *Wage-Earning Women: Industrial Work and Family Life in the United States, 1900-1930*(Oxford University Press, 1979, kindle, 1686-1687/3066.

¹⁰ アラン・コルバン、前掲書、364～365 頁。

¹¹ Sarah Eisenstein, *Give Us Bread but Give Us Roses: Working Women's Consciousness in the United States, 1890 to the First World War*(Routledge & Kegan Paul, 1983), 88-89.

¹² Elyce J. Rotella, *From Home to Office: U.S. Women At Work, 1870-1930* (UMI Research Press, 1981), 1, 38.

¹³ Tentler, *op.cit.*, 2007/3066.

¹⁴ Eisenstein, *op.cit.*, 49, 112-125.

¹⁵ Rosalyn Baxandall, Linda Gordon, Susan Reberby, *America's Working Women*(Random House, 1976), 83-84.

⁴ Max Kaplan, *Leisure in America: A Social Inquiry*(John Wiley & Sons, Inc., 1960), 15-22.

⁵ J. デュマズディエ、中島巖訳『余暇文明へ向かって』(東京創元社、1995 年)、4, 17～19 頁 [Joffre Dumazedier, *Vers Une Civilisation Du Loisir?* Seuil, 1962]。

⁶ アラン・コルバン、渡辺響子訳『レジャーの誕生 (新版) 上・下』(藤原書店、2000 年)

⁷ 杉座秀親「西欧の余暇論を読む」瀬沼克彰／藺田碩哉編、日本余暇学会監修『余暇学を学ぶ人のために』(世界思想社、2004 年)、172 頁。

⁸ Roy Rosenzweig, *Eight Hours for What We Will: Workers & Leisure in an Industrial City, 1870-1929*(Cambridge

をしたが、社会からは批判の目が向けられていたこと、そして独身女性の最終目標は親と労働からの解放である結婚であったことを明らかにしている。

2. 労働者階級の独身女性の余暇の考察

一本書の要約

第二章では本書の内容を要約する。本書の目次は次のようになっている。なお、要約のなかで、leisure が時間を意味する場合は余暇、娯楽を意味する場合は、レジャー、娯楽など、文脈にあわせて訳出している。

本書の目次

序章

第一章 労働者階級の余暇、同性同士の世界

第二章 余暇と労働

第三章 スタイルを気取って

第四章 ダンス狂

第五章 コニーアイランドへのお出かけ

第六章 安い劇場とニッケルオデオン

第七章 働く女性の娯楽の改革

最終章

2-1. 既婚男女と独身女性の余暇

著者は序章で本書の目的を述べ、続く第一章、第二章では労働者階級の既婚男女と独身女性の余暇の違いを明らかにしている。

19 世紀後半、ニューヨークの労働者階級は貧困で余暇にお金をそれほどかけることはできなかった。しかし、そんな状況のなかでも労働者階級の夫は、ビリヤード場、野球場、社交クラブ、酒場など公の場で、家計をかえりみずに、酒、スポーツ、ギャンブルに興じ余暇を楽しんでいた。特に酒場は、仕事帰りに男同士でビールを飲み、時に労働組合の集会も開かれる男性の社交と団結の場であった。そのうえ性的搾取である売春が酒場に持ちこまれるようになると、余暇の男性性はさらに強化されたのである。一方、妻にとっては安アパートの階段、家の玄関、公園などで、近所の人や友達、親戚など女同士で噂話や散歩をすることが余暇だった。家が余暇の中心であり、カーテン、カーペットなどで家を飾ることが妻の余暇の楽し

み方であったという。著者はある研究者が「妻は辛い仕事が毎日あり、娯楽はほとんどなく、たまに階段で噂話をする程度」と指摘した¹⁶ことをあげ、妻の余暇の本質を示している。妻の余暇は家計を考慮してお金はかけず、下宿人の部屋代や洗濯を請け負うことによる家事サービスから得た妻の収入でさえも家計の足しとされた。このように夫の余暇は家庭から離れて男らしさの精神を高めたが、妻の余暇は家庭にしばられたものであった。つまり、既婚男女の余暇は性別分化が基本であり、従来のジェンダーの枠組みにあったことを示している。

既婚男女とは異なり、労働者階級の独身女性の余暇には男女混合の楽しさと自由があった。当初、独身女性は貧困から家族を守るために賃金労働をした。次第に家計に貢献し家庭内で存在感を高めると、仕事帰りに余暇を楽しむようになる。ストリート、公園、ダンスホール、ナイトクラブ、遊園地、映画館へ出かけ、男性とのおしゃべり、ゲーム、ダンス、映画を楽しんだ。独身女性が求めたのは、男性との社交、デート、ロマンスであった。時に両親や中産階級が眉をひそめる男性とのいちゃいちゃ、キス、ハグを楽しんだ。そしてダンスホールの入場券や食事をおごられることとの引き換えに、男性と性的関係を持つこともあったという。このように余暇を楽しんだ独身女性であったが、最終目標は労働と両親から逃れるための結婚であった。著者は、これらの事象について、男性からおごられることとの性的関係は、女性の物質的依存であり社会的な自由を弱める結果になったと主張する。さらに最終章では、労働者階級の独身女性は、余暇を通じて異性間の文化を楽しんだが、結局は家父長制とビクトリア時代の概念である経済的・性的従順のなかに留まったと結論づけている。

2-2. スタイルは自己表現

第三章では、労働者階級の独身女性にとって、流行のスタイルで着飾ることは自己表現だと著者は主張する。独身女性は、ダンスホール、劇場、

¹⁶ Carol Groneman, Mary Beth Norton, “To Toil the Livelong Day”: *America's Women at Work: 1780-1980*(Cornell University Press, 1987), 102.

公園で、自分達の価値観を、洋服、髪型、化粧、言葉使いで表現した。胸元を開けたドレス、薄手のストッキング、ハイヒール、奇抜な帽子、高くセットした髪型は、裕福な女性のファッションの模倣であり、また売春婦のような派手な化粧や洋服をも取り入れていた。同僚や友達を“レディフレンド、ジェントルフレンド”と上品な言葉で呼びあった。このようにスタイルを創ることは、新しい自分を試してアイデンティティを模索することであった。それは仕事の厳しさや家庭の現実から逃れるものであったのである。こういった労働者階級の独身女性のスタイルや価値観を非難したのが、中産階級の人々である。第七章では、中産階級の改革者が、純潔、上品さ、家庭性という従来の女性の役割について労働者階級の独身女性に教育したが、抵抗され失敗した過程を述べている。また、中産階級の女性のなかにも、女らしさは従来の女性像に限定できないという考えも生まれた。こうして余暇の楽しみは階級を越えて発展していったのである。

2-3. 商業化による余暇の発展

第三章から第六章では、余暇の場が商業化されて階級、性別を越えて発展していく過程を示している。ストリートに集まることから始まった若い男女の余暇は、職場仲間が集まる社交クラブ、ダンスホールへと発展する。なかでもダンスは独身女性が最も熱中した娯楽であった。1910年にはニューヨークに500軒以上のダンスホールが开店し、商業娯楽の場として発展した。次に余暇を大衆化させたのがコニーアイランドである。遊園地、ビーチ、ピクニック場は、独身女性にはアパートや職場からの脱出先であり天国であった。また、労働者階級は酒場やサーカス、中産階級は西側のファミリーホテル、富裕階級は東側的高级ホテルなど、階級により余暇の場がわかれていた。ギャンブルハウス、売春宿など男性の余暇の場や、子供と家族で楽しめる遊園地も共存していた。そして最大の娯楽は、1905年に登場した映画である。入場料の安さ、わかりやすい筋とアクション、女性の文化と結びつき人気となった。独身女性はスクリーンで見る恋愛や豊かな暮らしに魅了され、既婚女性は子供連れで楽しんだ。こうして大衆は余

暇を楽しむようになったのである。

3. 本書の意義と問題点

3-1. 若い独身女性の余暇の意義

本書は、家父長制、ビクトリア時代の女らしさの概念が、いかに社会に根強く定着していたかを示している。そのなかで、労働者階級の独身女性が余暇を通して社会の慣習に抗う姿を明らかにした点に意義があった。著者は独身女性の余暇を楽しむ自主性を評価したが、経済的な自立がともなわない独身女性は、性別分化という従来のジェンダーを変えることはできなかったと結論づけている。しかし評者は、完全な経済的自立に至らなくても、余暇での精神的自立は、独身女性にとっては、自己実現のひとつのステップであり評価するものだと考える。そこでいま一度、独身女性の余暇の意義を考察したい。

余暇は日本語で表記すると、余った暇（ひま）な時間であり、その文字の意味から現代に生きる私達の理解に誤解が生じる。働く独身女性にとっての余暇は、余った暇な時間ではなく“主体的に自分が獲得した時間”であり“自分らしく生きる唯一の時間”であった。それは家父長制のなかで娘の義務とされていた家事労働の時間でもなく、雇用主に強要される賃金労働の時間でもなく、主体的に選びとった自分の時間である。両親や雇用主、世間の視線を逃れ、街に出かけて男の子とおしゃべりをしてちやほやされる。工場で汗まみれの服を脱ぎ捨てて着飾ってダンスホールで踊り注目される。自分で稼いだお金で自分の時間を獲得し、異性である他者から容認されることに生きる実感を抱くのは自然なことだと評者は考える。働く独身女性のなかにはより多くの自分の時間を獲得するために、両親の家を離れて友達同士で部屋を借り下宿をする者もいた¹⁷。本書のなかでも、独身女性は自由な時間と自主性が許される仕事に集まり、雇用主が残業で時間を搾取することに憤ったと、時間へのこだわりが述べられている¹⁸。自分の時間を持つなかで自分の意思で物事を決めて生きることは、経済的自立に至らなくても精神

¹⁷ Joanne J. Meyerowitz, *Women Adrift*(The University of Chicago Press, 1988), 8. 1900年にはシカゴの移民の女性賃金労働者の5分の1が家族から離れて生活していた。

¹⁸ 本書、40頁。

的自立であり、自己実現への第一歩であったと考える¹⁹。その例として、本書では中産階級の改革者による教育に、労働者階級の独身女性が反発したことがあげられる²⁰。ここには階級を越えて自分の意見を主張する姿が見てとれる。

1903年には、女性労働者は階級を越えて女性労働者を組織化して婦人労働組合同盟を設立し、賃金や労働環境の向上を求めた。創設者には労働者階級の女性も名を連ねていた²¹。さらに第一次世界大戦、第二次世界大戦の戦時労働に参加した既婚女性には、若い時に賃金労働の経験を持つ女性がいたことも推測できる。戦後、帰還した男性の仕事を確認するために、女性は家庭に戻るべきという考えが政府やメディアにより宣伝されたが、女性は次第に仕事を持つようになる。貧困という理由があったとしても、そこには自らの意思で働く女性の姿がある。1990年代には、女性の家事と仕事の二重負担を改善するために、ワークライフバランス（仕事と生活との調和）の考えが導入される。アーリー・ラッセル・ホックシールドは、ワークライフバランスを実践した企業に取材をした際に、働く女性の意識が変化していることを明らかにした。アンケートによると職場が家庭と感じる人は85%、その割合は男性より女性が多かったのである。そして女性にとって職場がくつろぎの場であり、自分が評価され有能だと感じる場が職場であるという声をひきだした²²。2012年にリザ・ムンディは、主要な稼ぎ手が夫から妻へと一部変化していると指摘した。1970年のアメリカでは妻が夫の収入を上回る割合は1桁であったが

2012年には40%と上昇し、男女の役割を転換して生活する事例をあげている²³。このように、女性が生き方を選択できる環境に変化していることは明らかである。これは女性が自分の意思で物事を決定してきた軌跡の上に成り立つものであろう。

しかし、世紀転換期と同様の問題も存在する。現代においても若い女性にとって“自分の時間”は充分とはいえない。自分の時間を単に時間の長さだけで測定することはできないが、次の数値はひとつの指標となろう。アメリカ政府の調査²⁴によると、2003年～2010年までの15～17歳の男女の自由時間の1週間の平均値は、移民の両親の娘は338.5分、アメリカ生まれの両親の娘が354.7分、移民の両親の息子は377.1分、アメリカ生まれの両親の息子が407.0分である。家事の1週間の平均値は、移民の両親の娘は74.0分、アメリカ生まれの両親の娘が55.8分、移民の両親の息子は44.3分、アメリカ生まれの両親の息子が41.0分である。男性より女性の自由時間は少なく、特に移民の両親を持つ娘は、自由時間が1日約48分と最も少なく、家事に従事している時間が多いことが導きだせる。この理由として、移民の家庭は平均収入が少ないが子供の数は多く、兄弟姉妹の世話に娘の時間がとられること、移民の両親はアメリカの両親よりも伝統的なジェンダーの役割への期待があることと分析している。また、ユニセフによると南アジアとアフリカなどの開発途上国では、10代後半で女子は結婚をさせられ家庭に入る率が高い。その要因は、経済的な苦しさから娘を嫁がせたい、また女子は男子ほど教育が必要ではないという考えが根底にあるためだと指摘する²⁵。開発途上国では、現代でも若い独身女性が自分の時間そして自分の人生を決められない状況が存在する。若い女性の自己実現のためには、仕事、教育、生活できる環境を提供し、自分の意思で物事が決定できる認識を持つように働きかけることが

¹⁹ 日経ビジネス ONLINE

<http://business.nikkeibp.co.jp/article/person/20070912/134667/?rt=ocnt> 2013年12月30日アクセス。

遙洋子は、経済力がある人＝自立、経済を誰かに頼る人＝自立していない人と考えていいものか、と疑問を提示する。評者もこの考えに同意する。また、上野千鶴子は講演で、自立とは経済面、生活面、精神面があると述べている。具体的には、自由にできるお金があり、自分ひとりで日常の家事をこなし、誰かに頼らず生きていることと説明する。

²⁰ 本書、171、172頁。

²¹ エレン・キャロル・デュボイス、リン・デュメニル、小檜山ルイ訳『女性の目からみたアメリカ史』（明石書店、2009年）、437頁。

²² アーリー・ラッセル・ホックシールド、坂口緑／中野聡子／両角道代訳『時間の板挟み状態 タイム・バインド 働く母親のワークライフバランス 仕事・家庭・子どもをめぐる真実』（明石書店、2012年）、304～306頁。

²³ Liza Mundy, *The Richer Sex: How the New Majority of Female Breadwinners Is Transforming Sex, Love, and Family* (Simon & Scuster, 2012), 5-6.

²⁴ U.S. Bureau of Labor Statistics, American Time Use Survey <http://www.bls.gov/opub/mlr/2012/06/art1full.pdf> 6, 9, 10. 2013年10月28日アクセス。自由時間とは家事、学校、食事、睡眠、身だしなみなどの時間を除いた時間である。

²⁵ http://www.unicef.or.jp/library/pdf/Progress_for_Children_-_No._9_jp.pdf 2013年10月28日アクセス。

重要である。

3-2. 仕事より結婚を選択した理由

次に本書を読んで生まれた疑問について考察したい。それは「労働と余暇で自分の時間を獲得した女性が、なぜ結婚を目標としたのか」という問いである。労働と余暇の参加が家父長制からの解放であれば、なぜ家事労働を選択し家父長制の世界へ戻ったのか。ここでは世紀転換期の既婚女性の家事労働と独身女性の賃金労働を、自分の時間、仕事内容、社会的地位の3点から比較を試みたい。

まず、自分の時間について考察する。本書では主婦の自由時間は殆どなかったと述べている²⁶。森も19世紀の主婦は家事労働で毎日忙しく、外で働くことは時間的にも職不足からも困難だったと記している。一方、独身女性は仕事帰りにわずかに自分の時間を確保できたが、家に帰れば家事に時間をとられていた。仕事内容ではどのような違いがあったであろうか。主婦の家事労働は、食材を調達して料理する、水を汲む、洗濯をする、汚水を捨てる、掃除をする、衣類を繕う、下宿人の世話をするなど多岐に渡る²⁷。家事労働の場は貧しい安アパートであり、環境も恵まれてはいない。家事サービスで得た自分の収入も家計に使われる。独身女性の仕事は、主に工場、販売、家事サービスであった。家事サービスは時間の拘束を受け、工場は低賃金、不衛生な労働環境、骨の折れる仕事であり、健康を害する者が多かった。そんな状況で、結婚は賃金労働から逃れる救済であったという²⁸。アイゼンステインは、働く女性が当初は希望を持ち、現在の工場から抜け出て他の仕事で自活することを目標とするが、厳しい仕事を続けるうちに希望を失い、結婚を選んだと述べている²⁹。賃金も家計の足しにされ、自分の自由になるお金は小額であった。最後に社会的地位で比較してみよう。テントラーは多くの夫が妻に家庭での権限を委譲し、妻は家庭で権力を持つことができたが³⁰、独身女性の賃金労働は、情緒的安定も社会的

地位も得られなかったと述べている³¹。マククリーンは、働く独身女性は「ただの工場の女の子」と言われ社会的疎外感を抱くこともあったと述べている³²。作家で権利活動家のセルマ・ジェイムズはアメリカの独立放送局デモクラシー・ナウ!の2012年のインタビューでこう語る。17歳で結婚して18歳で子供を生んだが若い女性にはあたりまえの選択だった。結婚だけが自主性を持ち独立できる道であり、結婚しなければ両親に連れ戻されたと答えている³³。ジェイムズは移民ではないが労働者階級の家庭出身であり、移民の女性と共通する家庭環境であったと推測できる。以上から、独身女性の賃金労働と既婚女性の家事労働を比較すると、独身女性がわずかながら自由になるお金はあったが、基本的にどちらも収入も時間もなく、経済的な自立には至ってはいない。仕事内容はともに厳しいものだが、家事労働は家長から託されていたため自由裁量の部分があることは想像できる。最も異なるのは社会的地位である。未婚のまま職場と家庭のヒエラルキーの世界に留まり拘束されるよりも、結婚して副家長として家庭で力を持ち、社会的に認められることの方が、女性には身近な選択であったことが明らかである。これらの要因が女性に結婚を決断させたのである。

3-3. 若い独身女性のセクシュアリティの問題

本書のもうひとつの意義は、先行研究では明らかではなかった世紀転換期の若い独身女性のセクシュアリティを考察した点にある。そこには現代の日本と同様の問題提起があった。著者は若い女性が、余暇を楽しむために、男性に食事やダンスホールへの入場料をおごってもらうことと性的関係を交換していたことを指摘し、それは女性の社会的な自由を弱め、解放ではないと主張した。しかし若い女性を間近に見ていたレストランのウェイターは、お金よりも楽しい時間との交換であったようだと言っている。ある道徳者は、お金のた

²⁶ 本書、22頁。

²⁷ 森泉『アメリカ〈主婦〉の仕事史』（ミネルヴァ書房、2013年）、93～94頁。

²⁸ 本書、37、45頁。

²⁹ Eisenstein, *op. cit.*, 21.

³⁰ Tentler, *op. cit.*, 1973, 1979/3066.

³¹ Ibid, 1486/3066.

³² Annie Marion MacLean, *Wage-Earning Women* (The Macmillan Company, 1910), 19. <https://archive.org/stream/wageearningwomen00maclean/page/98/mode/2up> 2013年10月10日アクセス。

³³ http://www.democracynow.org/blog/2012/4/18/video_sex_race_and_class_extended_interview_with_selma_james_on_her_six_decades_of_activism 2013年10月15日アクセス。

めではなく、贈り物、喜び、注目されたい気持ち、性への興味のためだと述べる³⁴。このように解釈は多様であり、著者の主張も経済的・道徳的な見地からは納得できる。しかし著者の視点には若い独身女性の気持ちは考慮されていないと評者は考える。当時の独身女性は、貧困のために家庭でも仕事場でも働かされ、自分を認めてくれる他者の存在は少なかった。家庭では両親に管理され、社会からは下品だと非難され、職場では上司から“愚かな動物”とそしられる。服装や化粧の見た目にこだわり、自分の民族や階級と関わりがある本当の名前ではなく、職場などではイギリスの貴族の名字をあえて使用していたことから³⁵、自分に価値を感じられないことが読みとれる。そんな現実のなかで、自分をかわいいと褒めてくれる男性と出会い、食事を御馳走してくれて楽しくダンスができた。その人に抱きしめられることで自己肯定感を抱くのは自然なことだと考える。これは現代の日本においても同様の感情が存在するのではないだろうか。例えば、日本でワリキリという自由売春を行う若い女性の多くが、精神疾患、DV、自傷行為など、社会に適応できない自分に傷ついている。抛り所は、自分の居場所、必要とされる感覚であり自己肯定感である³⁶。また、父の望むエリートコースをはずれ家庭での居場所が持てない少女が性的サービスを始める。その少女にとって大切なことは、父に否定されても自分の存在価値は否定されないという自己肯定感であった³⁷。現代日本の若い女性と世紀転換期の独身女性に共通するのは、自己肯定感の希求ではないだろうか。もしも、自分が受容される喜びが性的交換であるならば、それは自分で選びとった自由という見方もできる。また、性的関係を持つ際に意思があるかどうかで関係性は異なる。本書でも「私は健全

な若い女の子でかわいいと言われたが、他の女の子みたいに寝たりしなかった」という語りがある³⁸。このことから、当時の女性は、個人差はあるが自分の意思で性的関係を選択したことは明らかであり、それは社会的な自由のひとつであると評者は考える。

3-4. 本書の問題点

あえて本書の課題をあげるとすれば次のような点である。すなわち、若い女性の余暇の行動は歴史のなかでどう考えるべきなのか、1920年代のフラッパーの登場や第二波フェミニズムとどのように関連しているのか、著者の考えは提示されていない。そのためには、労働者階級の独身女性と関わりの深い独身男性の余暇、アフリカ系やヒスパニック系のアメリカ人の女性の余暇の比較考察が必要だと考える。

しかし、本書は世紀転換期の労働者階級の独身女性の問題が、現代の問題であることを提示し、一般の女性の歴史に目を向けさせてくれた貴重な一冊であることにはかわりはない。

(かわさき けいこ・東京外国語大学大学院博士前期課程)

³⁴ 本書、111頁。

³⁵ Nan Enstad, *Ladies of Labor, Girls of Adventure: Working Women, Popular Culture, and Labor Politics at the Turn of the Twentieth Century* (Columbia University Press, 1999), 59-60.

³⁶ 荻上チキ『彼女たちの^{ワリキリ}売春 社会からの斥力、出会い系の引力』(扶桑社、2012年)、9、10、55、73頁。
ワリキリとは主に出会い系サイト、出会い喫茶、テレクラなどの出会い系メディアを活用して客を獲得して、個人で行う自由売春。

³⁷ 宮台真司編、速水由起子著『〈性の自己決定〉言論 援助交際・売買春・子どもの性』(紀伊国屋書店、1998年)、26頁。

³⁸ 本書、3頁。